－所蔵作品紹介－

三沢　厚彦　MISAWA Atsuhiko
Animal 2001-01

作品データはこちら

どこかほほえましくなるようなチーター。草原を疾走するあの野生のチーターのイメージとはいささかちがったもののようにみえる。腹が少しふくらんで、足も太めで地面をしっかり踏みしめて立っている。尻尾を水平方向に波立たせた大胆な造形が目を引く。目つきも野生の動物を感じさせる鋭さはみられない。耳を立てた頭部はどことなくユーモラスである。作品の大きさはほぼ実物大ぐらい。これまでにみたことのないチーターのイメージが新鮮である。

作者はチーターの姿を博物学的に正確に再現しようとしたものではないことは明らかであるといえるだろう。よくみるとこの作品は寄せ木で全体が構成され、ノミ跡をはっきり残した荒削りな表面に油絵の具で全体が彩色されている。「ドローイングを描くみたいに彫刻をつくりたい」と作者はいう。その言葉通り作者自身がもつ動物像が屈託なく刻されているといえるだろう。

この作品の作者、三沢厚彦は1961年に京都府に生まれ、1989年に東京芸術大学大学院彫刻専攻を修了した。以降約十年間は身のまわりの雑多なもの、廃材や流木の断片などを無数に寄せ集めたアッサンブラージュ作品を制作していた。2000年には新たなに楠で動物の頭部を彫刻した"Head"シリーズに着手。「99年くらいから…木が彫りたくなったんです」と語っているが、作者の関心は寄せ集めることから彫ることによる制作へとにわかに移っていったのである。そしてまもなくこの作品のように動物の全身を彫刻した"Animal"シリーズへと発展していった。2002年には第20回平櫛田中賞を受賞するなど若手木彫作家として近年注目を集めている。

古くから彫刻家たちは動物彫刻にも取り組み、すぐれた作品が数多く残されていることは承知のことであるが、人間像と同様、動物もそのさまざまな表情や姿、個性が表現されてきた。単に愛らしい存在ということではなく、作者は人間と同じ生命をもち、造形のモティーフとして限りない豊かさをもつ動物たちに真摯な視線を向けている。三沢厚彦はこれまでの概念にとらわれず全く新たな動物像をつくり出し、その表現の可能性を切り開いているのである。

参考文献：三沢厚彦著『三沢厚彦　アニマルズ』
求龍堂　2002年

旭川美術館だより「氷華」No.45（2004.３発行）「所蔵作品から」より